



**Data**

監督：ロマン・ポランスキー  
 出演：エマニュエル・セニエ/マチ  
 ユー・アマリック

---



---



---



---



---



---

## 👁️👁️ みどころ

フランスの巨匠ロマン・ポランスキー監督が80歳にして「マゾ」をテーマとした2人芝居を演出！近時の『戦場のピアニスト』（02年）、『オリバー・ツイスト』（05年）、『ゴーストライター』（10年）、『おとなのけんか』（11年）はすべて星5つだったが、これも見事に星5つ！

オーディションに遅れてやってきた、いかにも「大阪のおばちゃん」風の女性ワンダは、なぜセリフをすべて暗記しているの？そして、演出家のトマがなぜワンダに振り回され、召使のようにかしづくの？

知性と色気を兼ね備えたセリフ回しを堪能しながら、「“神、彼を罰して、一人の女の手に与えたもう”」のクライマックスをしっかりと味わいたい。

— \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \* — \*

## ■□■ポランスキー監督の直近4作品は、すべて星5つ！■□■

1933年生まれフランス人監督ロマン・ポランスキーといえば、昔は『ローズマリーの赤ちゃん』（68年）が有名だったし、その後の『チャイナタウン』（74年）、『テス』（79年）も有名。そして、近時(?)では、第75回アカデミー賞監督賞、脚色賞、主演男優賞の3部門を受賞した『戦場のピアニスト』（02年）（『シネマルーム2』64頁参照）が有名だ。私が映画評論を書き始めた後の『戦場のピアニスト』、『オリバー・ツイスト』（05年）（『シネマルーム9』273頁参照）、『ゴーストライター』（10年）（『シネマルーム27』143頁参照）、『おとなのけんか』（11年）（『シネマルーム28』136頁参照）についての私の採点は、すべて星5つだからすい。

『おとなのけんか』は、2組の夫婦、4人の男女だけが登場する、タイトルどおりの物

語を79分に凝縮した名作だった。それに対して本作は、それをさらに凝縮し、登場人物は演出家のトマ・ノヴァチェク（マチュー・アマルリック）と遅れてオーディションにやってきた女優ワンダ・ジュルダン（エマニュエル・セニエ）の2人だけで、上映時間は96分。舞台もオーディションを行うための古びた劇場だけだから、製作費はきつと安上がり・・・。



(C) 2013 R. P. PRODUCTIONS - MONOLITH FILMS

## ■□■遅れてやってきたこの女は、一体何者？■□■

ワンダ役を演じるエマニュエル・セニエは、ポランスキー監督の奥さん（彼女は1966年生まれだから、何と33歳も離れている）だから、出演料はどのようにでもなるはず。出演者2人だけの映画で96分持たせるためにはかなりの演出力を必要とするが、2人の俳優が次々と繰り出す大量のセリフは刺激的な言葉が多いうえ、人間関係に常に緊張感が保たれているから飽きることはない。

オーディション風景とそこでの厳しい競争をテーマとしたすばらしい映画が『コーラスライン』（85年）。邦画でも、薬師丸ひろ子が主演した『Wの悲劇』（84年）は、オーディションをキーワードにした面白い映画だった。このように、オーディションはもともと平等な、実力主義を徹底させた方式だ。しかし、トマは今日、既にオーディションで35人の女優と会ったが、「今どきの女どもは、“マジ” だの“サイコー” だのガキみたいに話す」から、せつかくいい台本を作っても舞台を成立させるのは到底ムリ。今日は諦めて帰

ろうとしていたところに、雨に濡れて飛び込んできた中年女がワンダだ。

『毛皮のヴィーナス』の脚本を書いた（正確には脚色をした？）演出家のトマがセリフをすべて覚えているのは当然だが、なぜオーディションを受けに来ただけのこの女が芝居のセリフをすべて暗記しているの？そんな疑問から恐る恐るスタートする2人だけの舞台劇を、まさに「舞台感覚」でしっかりと楽しみたい。

## ■□■これは文学？それともポルノ？■□■

サド（サディスト、サディズム）という言葉の原点が、マルキ・ド・サド侯爵（の小説）にあることは、映画『クイルズ』（00年）を観ればよくわかる（『シネマルーム1』74頁参照）。他方、マゾ（マゾヒスト、マゾヒズム）という言葉の原点が、ザッヘル＝マゾッホの小説『毛皮を着たヴィーナス』にあることを、あなたは知ってる？私は本作を観てはじめてそれを知ったが、この自叙的小説は1870年に出版されて非難が殺到した衝撃作らしい。



(C) 2013 R.P. PRODUCTIONS - MONOLITH FILMS  
12月20日（土）、Bunkamura ル・シネマ、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国公開

その原作を舞台用に脚色し、自ら演出しようとしている演出家のトマは、原作をエレガントで美しい愛の物語と解釈していた。ところが、オーディションに遅れてやってきた、厚かましさがだけ取り柄の「大阪のおばちゃん」のようなワンダをせっかくテストしてやっているのに、テストの途中で、「この本は女性差別のポルノ本だ」と言われたから、ついカッとなったのは当然。最初の3頁のテストをやり始めた時は、突如変身し、役に成りきったワンダに一気に興味を示したトマだったが、これにはアレレ……。いったんは「これにてオーディションは終了」「やっぱり君はクビだ」となったのは当然だ。

役者は舞台で演じるのが仕事だから、原作や脚本の解釈はどうでもいいのかという見方もあるが、やはり生身の人間が舞台でその役に成りきるためには、原作や脚本を十分理解し、納得していなければ……。しかして、ザッヘル＝マゾッホの原作とそれを脚色したトマの脚本は、文学？それともポルノ？

## ■□■トマの役者としての能力は？■□■

本作のパンフレットには、『毛皮のヴィーナス』をより楽しむためのワンダとトマの台詞解説があり、その1つとして「神、彼を罰して、一人の女の手にと与えたもう」の解説がある。これについては、映画の中で「小説の冒頭の言葉だ。『ユディト記』から。聖書

外典だ」「これって性差別よ」というセリフで説明されるが、それだけで十分理解できる人は少ないだろう。その他、本作のセリフの中には、日本人には馴染みの薄いセリフがたくさんあるので、是非この解説は読んでおきたい。私は、これが性差別なのかどうかという朝日新聞的(?)な論争に興味はないが、本作ではこのセリフがキーワードとして大きな意味を持つので十分に注目したい。

本作のストーリーは、オーディションに遅れてやって来たワンダをトマが仕方なくテストしてやるという導入部からスタートする。そして、あまりにも完璧なワンダのセリフ回到しにトマが驚き興味を示すところから、本格的ストーリーが始まっていく。面白いのは、テストしてやっているはずのトマが、いつの間にかテストを受けさせてもらっているワンダからおだてられたり、怒られたり、修正案を出されたりする中で、次第にトマも役者になっていき、『毛皮のヴィーナス』のクシエムスキー博士役と一体になっていくことだ。トマがワンダから褒められたのは、最初の3頁のテストから「もう少し続けよう」となり、トマ自らが少年時代に伯母に鞭打たれたことに快楽を覚えた体験を告白するシーンだ。そのセリフはトマが脚色して作ったものだが、クシエムスキー博士の体験はトマ自身の体験・・・？

ひょっとしてそうかもしれないが、なぜ今日はじめて会ったばかりのこのガサツそうな女に、俺の隠れた本性が見えるの・・・？しかし、ワンダの言っていることは的を射ていることが多かったから、トマは喜喜としてワンダのアイディアに従って自分の台本の書き直しさえも……。これって一体ナニ？トマは一体何をしているの？



(C) 2013 R. P. PRODUCTIONS - MONOLITH FILMS

12月20日(土)、Bunkamura ル・シネマ、ヒューマントラストシネマ有楽町ほか全国公開

## ■□■小道具は毛皮と鞭、そしてハイヒールとブーツ■□■

文学作品を味わうには、何よりも「感性」が大切。そして、文学作品を味わう最大の楽しみは「非日常性」だから、感覚的に日常生活から離脱することが不可欠。そうしなければ、トマが告白する、素っ裸にされ毛皮に包まれる中で鞭打たれることの快感は理解できないし、毛皮への愛着も理解できないはずだ。他方、ザッヘル＝マゾッホのマゾ文学を理解するための不可欠な小道具がハイヒールとブーツ。また、このシチュエーションにおい

て、女優が身に付けている下着やストッキングの色は黒であることが絶対条件だ。

『ローマの休日』(53年)のオードリー・ヘップバーンは、時代からいっても彼女の年齢からいっても絶対この女優しかいないと万人が確信できる配役だった。それに対して、本作でワンダを演じるエマニュエル・セニエは、たしかに演技力という点では完璧だが、体型において満点とはいえない(?)のが少し残念。もともと、演出家としてオーディションの指揮をとっていたはずのトマがワンダの足元にひざまずき、「女ご主人様」の命令に従って喜悦の表情でハイヒールを脱がせ、ブーツを履かせるシーンは迫力がある(?)のでもっとと・・・。

近時、同性婚がもてはやされる傾向にあるが、同性婚の男同士、女同士が愛し合うシーンでは、絶対にこんな緊張感は醸し出せないはずだ。

## ■□■このクライマックスをあなたはどうか解釈?■□■

ワンダはオーディション用の衣装として、ドレスの他に毛皮の代用品となる毛糸の長いショールやロングブーツを持参していたから、台本の進行に従って次々と衣装を変えていくので、それに注目!他方、トマは演出家の立場だから本来衣装を変える必要はないが、ワンダが要求するままクシエムスキー役に入り込み、そのセリフを語っていたから、やっぱり衣装も変えた方がベター?そこでいったんは博士らしい(?)カッコいい衣装を着たものの、完全に力関係が逆転し、ワンダが「女ご主人様」役に、トマが召使役になると、必然的にトマは召使用の短い上着に。すると、これがよくトマに似合ったから皮肉なものだ。

そのうえ、ワンダのアイデアを新たに組み込んだストーリーが進行するにつれて、今トマの唇には赤い口紅が塗られ、履物もスニーカーからハイヒールに……。こうなってくると、トマの召使役は完璧にハマり役になってくるが、最後に待っていたのは、その首にかけられた犬の首輪。これは、ワンダが最初から自分の首に巻きつけてきたものだが、これをトマの首にかけたうえ、ステージ上にある場違いなサボテン(これは、1939年に公開されたジョン・フォード監督の西部劇『馱馬車』のミュージカル版の舞台セットの残りとしてトマが設定したもの)に首を縛りつけられ、両手まで後ろ手に縛りつけられてしまうと……。

本作冒頭のシーンは、雨のバリ。街路樹が立ち並ぶまっすぐな道をカメラが前進し、右へ折れて古い劇場の中に入り込んでいくというインパクトの強いものだ。登場人物がトマとワンダの2人しかいないのは前述のとおりだから、トマがサボテンに縛られてしまうと、その後は一体どうなるの……。?そこで思い出すのが「“神、彼を罰して、一人の女の手に与えたもう”」というキーワードだが、そのクライマックスシーンはあなた自身の目で。しかして、このクライマックスをあなたはどうか解釈?

2014(平成26)年12月26日記